ぶんごたかだし 豊後高田市

総括会議 ハピカム

ミライデザイン会議

大分合同新聞社が、次代を担う若手リーダーと一緒に地域の未来を考えるミライデザイン会議「ハピカム」。第17弾となる豊後高田市編が12月5日、市教育会館などで行われた。「1次産業」「観光資源」「地域力」の3分科会での話し合いを経て開かれた総括会議では、各分科会で出されたミライキーワード」を基に豊後高田市の未来について議論をさらに深めた。同市は人口3万人構想を掲げてUIJターンなど移住者政策に力を入れており、人口の社会増を達成するという成果も表れている。総括会議では、こうした移住者の意見をまちづくりにどう生かすかが一つのポイントとなった。市内には真玉の夕日、昭和の町など代表的な観光スポットもあるが、地元に住んでいる人が当たり前すぎて気付いていない魅力もたくさんある。その魅力を発見するために移住者の視点を生かすこと、また移住者だけでなく、住んでいる人、子どもたちに古里のファンになってもらう重要性も指摘された。参加者はこの日の出会いを郷土のさらなる発展につなげていくため、交流と活動の輪を広げていくことを誓い合った。

■ウェブ http://www.oita-press.co.jp
■スマートフォン http://www.oita-press.co.jp/h-come/

主催／大分合同新聞社 共催／豊後高田市、豊後高田商工会議所、西国東商工会
協賛／国立大学法人 大分大学 ㈱大分銀行 日本たばこ産業㈱大分支店

原色が疲れた心癒やす

挑戦する気持ちが大切

赤坂 分科会ごとにミライキーワードに込めた思いを説明してください。1次産業分科会のアグリモンスターはどういう意味でしょうか。

大森 分科会メンバーは農業の方が多くて、最初に問題点を挙げました。やっぱり農業は一人ではできない、人がいて畑がないと、移住してきた人がするにしても、もうかからないと農「業」にはならない。子どもを育てられるだけの収入があり、地域愛がないとこれから5年先、10年先には生活や販売ができないと思って、人が少なくなる中で地域を守っていくことも大切。豊後高田市は豊後高田市の色があるので、その色を大切にしていけたらいいなと思ってます。「改」は、ただ作るだけじゃく、品種を変えたり、違う時期に植えたり、新しい商品を開発したり、チャレンジする気持ちがないと新しいものができないので、特に大切だと思います。

松崎 六郷満山の開創1300年で、アドバイザーのJTBさんと組んでいくぞと前向きな話をしました。その中で、最近、団体旅行だけじゃなくて個人旅行客が増えているので、個人向けの情報発信もするべきだとの意見が出ました。昭和の町では、テーマパーク化したらいいんじゃないかとか意見はたくさん出たけど、前向きな話があまりできなくて、商店街と市が仲良くなって、1回リセットして、次のステップにいかないと展望が広がらないかなとか。最後に恋叶（こいかな）ロードの話をして、市も売っていきたいということなので、恋叶ロードらしいものができたらなるという話になりました。国東半島に来るお客さんの意識が変わってきていて、癒やしを求める人に向かって観光の発信ができればということ、観光の基礎は人だということ、豊後高田市は原色に囲まれたまちで、高田色に染められたらいいなということでこのキーワードになりました。都会にいると精神的にグレーや黒くなっている人が多い。その色をリセットするために豊後高田に来てくれているんじゃないかなと。都会は冬になるとイルミネーションをしたり、色が欲しいんですよ。でも豊後高田は原色のまちなのでイルミネーションなんかいらないですね。そんなことから色というキーワードになりました。

小川 キーワードは「豊後高田愛」。みんな基本は豊後高田が好きだよね、このまちに誇りを持っている人だからこそ課題を解決して発展したいよね、それから住んでいる人が元気で、子どもたちが誇りに思って帰ってきたり、どんどんUIターンを歩いたんですが、ガイドさんがいろんな歴史や伝説を話してくれながらで、すごく良かったんです。こんなことを子どもたちに教えていくと、きっと行ってみたいとなって、訪れることによって地域愛も生まれてくる。もし市外に行っても物語を話せる。そういったことでもアニメ化すると落とし込みやすいのではないかという発想です。

赤坂 私たちの世代は「まんが日本昔ばなし」のテーマ曲を聞くと非常に懐かしいものがありますが、地域の歴史を伝えるとか、人材を育てるという点で松崎さんいかがですか。

松崎 歴史が抜けていることはないと思うんです。住んでいて感じるのは、昔からやっている祭りだとか、お接待だとか、結構仏教とつながった生活で現在に至っているんじゃないかなと。形としては抜けているけど心の中では抜けていなくて、仏さんとすごく近い感じです。国東は仏教でもいろんな宗派があって、キリスト教も新興宗教もある。外から来る人を受け入れながら、許して認めて受け入れて来た先祖がいるから神仏習合の文化があるんじゃないでしょうか。

その人に会うために行く

赤坂 歴史を知ってもらうことは発信にもつながります。案内役や発信できる人がいることは観光でどの程度のウエートを占めるのでしょうか。

正田 ガイドがいることは、われわれが売り手側からすると非常に魅力的だと思います。最近では文殊仙寺（国東市）の秋吉文暢さんを見たいと言って訪れる人がいたり、全国各地に有名な家角人の方がいて、その人に会いたいからそこに行くか、旅行に行くっちゃかけてなる方が特に増えています。観光素材の一つの魅力になりますので、ガイド増えていくと発信に有効的じゃないかと思います。

赤坂 大森さん、観光の話とリンクできる部分がありますか。

大森 僕がつくっている落花生は明治時代から豊後高田で栽培されています。一度サラリーマンで外に出て、帰ってきた時ゆでた落花生を食べたら、子どものころに親や親戚と一緒に食べたことを思い出したんです。県外で落花生を売ると、横がいいねと言う人が結構多い。「昔、防空壕（こう）の上に植えたのが芋と落花生やったんよ、食べたら子どものころを思い出したよ」とよく言って。落花生を続けて8年くらいですが、栽培面積は九州一になっているのではと思っています。豊後高田の落花生はおいしいだけじゃなくて、量もアピールできるようになるんじゃないかと。これだけ思いがある食べ物はないと思うんで、続けていきたいと思っています。

赤坂 松崎さん、落花生を観光に生かせますか。

松崎 東京で落花生をゆでると言うとみんなびっくりするんですよ。千葉の一部の地区はゆでるそうですが、全国的にそこと豊後高田だけじゃないんですかね。ゆでた落花生を食べると子どものころを思い出して。大好きで、思い出を大切にして作ってくれているのはすごくありがたいです。豊後高田の農業は白ネギとソバが中心。僕はグリーンツーリズムをしていて、真崎のネギがきれいに並んでいる道を勝手に「ネギロード」と名付けてるんですよ。北九州などから来る修学旅行生は絶対その道を通るんです。縦恋（つまこい）のキャベツ畑とかとそっくりで、北九州とかで売っているのはほとんど豊後高田産なんです。修学旅行生には「ここのネギを召たらは初めて見るけど、普段食べるんだよ」と言うんです。せっかくいい ネギがあるのでネギ狩りができないかなと。観光客にネギロードを見せて、ここでできたものを食べているというのはすごくいいストーリーじゃないですか。僕も協力するので、大森さんにはぜひネギ狩りをやってほしいなと思います。

観光資源／アドバイザー
Takuya Hikida
正田卓也 さん
大分市、31歳。JTB九州大分支店グループリーダー。2007年入社。九州へのインバウンドの仕事を通して、地域の魅力を発信したい。

昭和の町で竹細工作り

赤坂 発信の話で、分科会では真玉と香々地の海辺の竹は日本一ではという話が出ましたが。

松崎 お店に来るお客さんが国東半島で竹を集めて京都などに送っているんですが、その人によると真玉と香々地の海沿いの竹は、竹細工をする人から評価が抜群で高値で売れると。竹職人に昭和の町に来てもらって、その竹を使って竹細工を作ってもらったら、昭和の町のイメージとも合っていいんじゃないかなと思ってます。

赤坂 外から人を呼び込むという意味では豊後高田は移住者が多い市です。移住者はどんな存在で、どんな刺激を与えてくれますか。

小川 そういった方の声こそ、たくさん聞く耳を持つべきです。私も地元の人間で、ゆで落花生は昔から食べているし、ネギも好き。豊後高田が好きなんだけど、井の中の蛙（かわず）の視点しかない自分たちだけではなく、やはり他の地域から来て住んでくれている移住者の視点を大切にするべきであり、「住んでよかった」「来てよかった」という意見を聞くことが豊後高田の良さにつながるのではないでしょうか。移住者が暮らしやすく、つながりやすくするかを真摯（しんし）に考えるべきだと思います。

子育て支援とは親支援

赤坂 育児環境を整えるための取り組みをご紹介いただけますか。

小川 住んでくれている人を大事にするというところでは、地縁血縁がなくて親戚も人がいない方が多いんです。困った時に手が差し伸べられる施策を行政や私たちが考えながらつくっていくべきだし、いろんな預かりもやっています。やっている病後児保育は昨年、その前年から約3倍に伸びました。そういった時にこそきめこまかな事業を用意するべきです。子育て支援とは親支援という面もあり、お母さんたちからは働き方に難しい部分があるというこの声を聞くんです。その声を受けて実際に取り入れてくれている企業もあります。

地域力／若手リーダー
Yumi Ogawa
小川由美 さん
豊後高田市、42歳。NPO法人アンジュ・ママ二期会代表。今の子どもたちが大人になった時、胸りに思えるような活気ある市にしなくてはいけない。

赤坂 全国的に看護師や保育士の免許を持っていても働いていない人がたくさんいますが、豊後高田はどうですか。

小川 たくさんいますね。私たちは元看護士さんや元保育士さんの力を借りてやっています。「空いている時間であったらと」言って力を貸してくれる方もいるので、どんどん参画してもらうことが重要ですし、そういった方はまだたくさんいらっしゃると思います。

充実した受け入れ体制

赤坂 地域資源や後継者といえば農業は特に大事だと思いますが、パワーのある人材がいますか。

大森 白ネギは若い人が帰ってきていて、他の作物に比べたら多いと思います。どうしても生活できるような形ができないと、残って後を継ぐことは厳しい。市段階や村上さん（自起・1次産業分科会）、どうですか。

村上 東京、大阪などで行われる新規就農者の相談会にブースを出し、たくさん相談を受けています。どんどん来てもらいたいんですが、農業は楽ですので、田舎で暮らしたいというのが先にあって、作りたい作物も決まっていない方がいたりします。そういった方とも十分に話をして、強い信念があれば受け入れています。研修や研修中の支援などを受け入れ体制も充実して、今も7人が移住して研修しています。現在の農家の後継者が継いでくれるのが一番ですが、いなければ外から呼んでこないといけない。集落営農では、高齢化で若い人が欲しいという要望があります。移住者を紹介していけたらと思っています。

六郷満山文化を学ぶ場に

赤坂 人口の社会増を実現しているのはすごいこと。取材活動を通して豊後高田についてどう感じているか、朝日記者（草平・大分合同新聞豊後高田支局長）に聞いてみたいと思います。

羽山 支局4年目で、途中からこの市を見ている立場から気付くところがあって、例えば昭和の町はできて10年以上たってから取材するようになったんです。町の人に言わせると、その時既にピークは過ぎていたと。それで見えてきた課題の記事を書いたことがあります。町を立ち上げた人の強い思い、熱い思いがあって、途中から来た僕のような若い人も、観光資源を指摘することは、皆さん悔しいと思うんですね。でも、そこを乗り越えていかないと、展望がないのかなと思っています。それが外から見た視点だと思うんですね。東京大学を出て国会議員の秘書をしていた若い人が、田染荘に魅了されて東京から移住して来ています。何で来たのか聞いたら、田染荘で見た景色がきれいだったのと、風景や色に魅了されたと。彼は今、まちおこしのグループの事務局長をしていて、わずか4、5年前に来た人を重要なポストに就けて活用する。その思いが共有できています。地域を持続的に盛り上げていくためには、地元の人にとって何でもないところに興味を持った人を大事にしていく必要があるのかなと思っています。

地元で学べるシステム

赤坂 田中先生、六郷満山文化、豊後高田はどんなことが素晴らしいのでしょうか。

田中 自然と文化が融合している奥深い地域という印象を持っています。平安時代まできかのほれば一つ一つのお寺に知識の豊富な偉いお坊さんがいて、言ってみれば大学の先生がじょうに暮らしているような地域ではなかったかと思います。分科会で、子どもたちが一度外に出るのは当たり前で、それから戻ってきればいいというお話がありました。それはそれで重要ですけど、大学に入るために古里を去ることが当たり前でいいのかなと感じています。大学側も若い人が地域を離れなくていい教育のシステムを提案できないのだろうかと。六郷満山の文化の中にはそういう学びのシステムがあったのではないでしょうか。大学に行くためには外に出るのが当たり前ということを、ひっくり返せるものを地域が生み出していく力があればいいなと。豊後高田にはそのお力があるのではないか、六郷満山文化はそのヒントをくれるのではと考えています。

1次産業／アドバイザー
Hirofumi Yonezu
万洋史 さん
福岡県出身、大分市在住。43歳。イオン九州天草店店長兼主任。1994年マイカル九州、2005年イオン九州入社。そばが打てるようになりたい。

継承を考える良い地域

赤坂 お話をいただいていないアドバイザーにこれまでの感想と提案をお聞きしたいと思います。

万 分科会のメンバーは一人一人が明確に課題を持っている人が集まり話をして解決できる仕組みができるのが豊後高田なのではないかと。それができるのが豊後高田なのではと感じました。システムを考えるそもそも論であったり、古いものを守るために新しいものを取り入れることができる地域だと思いますので、今後6日的意識を持って皆さんでお話をされることが重要なのではと思いました。

二宮 良い地域とは何かを金融機関の職員として企業目線で考えると、長く続いている企業は少ないなかで良い企業だと言えます。では長く続いているのはどんな企業かというと、代表者が次世代のことを考えていて、後継者の育成に力を入れていたりしています。従業員の方が元気よかったり、自社に誇りを持っているのも良い企業だと思います。良い地域も似たようなことで、次世代のことを考えていたり、誇りを持つ人が多い地域が良い地域なのかなと思いました。そういった方々を資源と捉えるならば、そのビースを伸ばしていけば自然につながっていって良い地域ができていくのかなと思っています。今日は本当に豊後高田愛を感じる方がいて、移住しようかと考えるほど貴重な体験をさせていただきました。

地域力／アドバイザー
Go Ninomiya
二宮剛 さん
大分市、29歳。大分ベンチャーキャピタル投資事業組合マネージャー。東九州自動車道開通の経済効果、アベノミクスの今後の展望が気になる。

高田のファンを増やす

赤坂 今日の感想と今後の目標について分科会の代表の方に一言ずつお願いします。

大森 帰ってきてまだ10年くらいで、今日初めて真剣に地域のことを考えました。今までは自分のことばかりで、地域のために何かしていたのかなと思います。今日、ここにいらっしゃる方は、ずっと地元にいらっしゃる方もいらっしゃるし、移住してきた人もいらっしゃる。その色をリセットするために豊後高田に来てくれているんじゃないかなと。都会は冬になるとイルミネーションをしたり、色が欲しいんですよ。でも豊後高田は原色のまちなのでイルミネーションなんかいらないですね。そんなことから色というキーワードになりました。

小川 キーワードは「豊後高田愛」。みんな基本は豊後高田が好きだよね、このまちに誇りを持っている人だからこそ課題を解決して発展したいよね、それから住んでいる人が元気で、子どもたちが誇りに思って帰ってきたり、どんどんUIターンを歩いたんですが、ガイドさんがいろんな歴史や伝説を話してくれながらで、すごく良かったんです。こんなことを子どもたちに教えていくと、きっと行ってみたいとなって、訪れることによって地域愛も生まれてくる。もし市外に行っても物語を話せる。そういったことでもアニメ化すると落とし込みやすいのではないかという発想です。

赤坂 私たちの世代は「まんが日本昔ばなし」のテーマ曲を聞くと非常に懐かしいものがありますが、地域の歴史を伝えるとか、人材を育てるという点で松崎さんいかがですか。

松崎 歴史が抜けていることはないと思うんです。住んでいて感じるのは、昔からやっている祭りだとか、お接待だとか、結構仏教とつながった生活で現在に至っているんじゃないかなと。形としては抜けているけど心の中では抜けていなくて、仏さんとすごく近い感じです。国東は仏教でもいろんな宗派があって、キリスト教も新興宗教もある。外から来る人を受け入れながら、許して認めて受け入れて来た先祖がいるから神仏習合の文化があるんじゃないでしょうか。

その人に会うために行く

赤坂 歴史を知ってもらうことは発信にもつながります。案内役や発信できる人がいることは観光でどの程度のウエートを占めるのでしょうか。

正田 ガイドがいることは、われわれが売り手側からすると非常に魅力的だと思います。最近では文殊仙寺（国東市）の秋吉文暢さんを見たいと言って訪れる人がいたり、全国各地に有名な家角人の方がいて、その人に会いたいからそこに行くか、旅行に行くっちゃかけてなる方が特に増えています。観光素材の一つの魅力になりますので、ガイド増えていくと発信に有効的じゃないかと思います。

赤坂 大森さん、観光の話とリンクできる部分がありますか。

大森 僕がつくっている落花生は明治時代から豊後高田で栽培されています。一度サラリーマンで外に出て、帰ってきた時ゆでた落花生を食べたら、子どものころに親や親戚と一緒に食べたことを思い出したんです。県外で落花生を売ると、横がいいねと言う人が結構多い。「昔、防空壕（こう）の上に植えたのが芋と落花生やったんよ、食べたら子どものころを思い出したよ」とよく言って。落花生を続けて8年くらいですが、栽培面積は九州一になっているのではと思っています。豊後高田の落花生はおいしいだけじゃなくて、量もアピールできるようになるんじゃないかと。これだけ思いがある食べ物はないと思うんで、続けていきたいと思っています。

赤坂 松崎さん、落花生を観光に生かせますか。

松崎 東京で落花生をゆでると言うとみんなびっくりするんですよ。千葉の一部の地区はゆでるそうですが、全国的にそこと豊後高田だけじゃないんですかね。ゆでた落花生を食べると子どものころを思い出して。大好きで、思い出を大切にして作ってくれているのはすごくありがたいです。豊後高田の農業は白ネギとソバが中心。僕はグリーンツーリズムをしていて、真崎のネギがきれいに並んでいる道を勝手に「ネギロード」と名付けてるんですよ。北九州などから来る修学旅行生は絶対その道を通るんです。縦恋（つまこい）のキャベツ畑とかとそっくりで、北九州とかで売っているのはほとんど豊後高田産なんです。修学旅行生には「ここのネギを召たらは初めて見るけど、普段食べるんだよ」と言うんです。せっかくいい ネギがあるのでネギ狩りができないかなと。観光客にネギロードを見せて、ここでできたものを食べているというのはすごくいいストーリーじゃないですか。僕も協力するので、大森さんにはぜひネギ狩りをやってほしいなと思います。

観光資源／若手リーダー
Toshiyuki Matsuzaki
松崎敏行 さん
豊後高田市中真玉、36歳。SOBA CAFE ゆうひ店主。2008年の開店以来、多彩なイベントを企画して真玉海岸の魅力アップに取り組む。

昭和の町で竹細工作り

赤坂 発信の話で、分科会では真玉と香々地の海辺の竹は日本一ではという話が出ましたが。

松崎 お店に来るお客さんが国東半島で竹を集めて京都などに送っているんですが、その人によると真玉と香々地の海沿いの竹は、竹細工をする人から評価が抜群で高値で売れると。竹職人に昭和の町に来てもらって、その竹を使って竹細工を作ってもらったら、昭和の町のイメージとも合っていいんじゃないかなと思ってます。

赤坂 外から人を呼び込むという意味では豊後高田は移住者が多い市です。移住者はどんな存在で、どんな刺激を与えてくれますか。

小川 そういった方の声こそ、たくさん聞く耳を持つべきです。私も地元の人間で、ゆで落花生は昔から食べているし、ネギも好き。豊後高田が好きなんだけど、井の中の蛙（かわず）の視点しかない自分たちだけではなく、やはり他の地域から来て住んでくれている移住者の視点を大切にするべきであり、「住んでよかった」「来てよかった」という意見を聞くことが豊後高田の良さにつながるのではないでしょうか。移住者が暮らしやすく、つながりやすくするかを真摯（しんし）に考えるべきだと思います。

子育て支援とは親支援

赤坂 育児環境を整えるための取り組みをご紹介いただけますか。

小川 住んでくれている人を大事にするというところでは、地縁血縁がなくて親戚も人がいない方が多いんです。困った時に手が差し伸べられる施策を行政や私たちが考えながらつくっていくべきだし、いろんな預かりもやっています。やっている病後児保育は昨年、その前年から約3倍に伸びました。そういった時にこそきめこまかな事業を用意するべきです。子育て支援とは親支援という面もあり、お母さんたちからは働き方に難しい部分があるというこの声を聞くんです。その声を受けて実際に取り入れてくれている企業もあります。

地域力／若手リーダー
Yumi Ogawa
小川由美 さん
豊後高田市、42歳。NPO法人アンジュ・ママ二期会代表。今の子どもたちが大人になった時、胸りに思えるような活気ある市にしなくてはいけない。

赤坂 全国的に看護師や保育士の免許を持っていても働いていない人がたくさんいますが、豊後高田はどうですか。

小川 たくさんいますね。私たちは元看護士さんや元保育士さんの力を借りてやっています。「空いている時間であったらと」言って力を貸してくれる方もいるので、どんどん参画してもらうことが重要ですし、そういった方はまだたくさんいらっしゃると思います。

充実した受け入れ体制

赤坂 地域資源や後継者といえば農業は特に大事だと思いますが、パワーのある人材がいますか。

大森 白ネギは若い人が帰ってきていて、他の作物に比べたら多いと思います。どうしても生活できるような形ができないと、残って後を継ぐことは厳しい。市段階や村上さん（自起・1次産業分科会）、どうですか。

村上 東京、大阪などで行われる新規就農者の相談会にブースを出し、たくさん相談を受けています。どんどん来てもらいたいんですが、農業は楽ですので、田舎で暮らしたいというのが先にあって、作りたい作物も決まっていない方がいたりします。そういった方とも十分に話をして、強い信念があれば受け入れています。研修や研修中の支援などを受け入れ体制も充実して、今も7人が移住して研修しています。現在の農家の後継者が継いでくれるのが一番ですが、いなければ外から呼んでこないといけない。集落営農では、高齢化で若い人が欲しいという要望があります。移住者を紹介していけたらと思っています。

愛情と誇りが伝わった

赤坂 田中先生、全体を通して感想をお願いします。

田中 昭和の町がどうなるかが一番気になったことの一つです。僕は近現代日本の美術の歴史を専門でやっているので、非常に近いところがあって、僕自身、昭和って好きなんです。おそらく昭和20年代から30年代のイメージで昭和の町はつくられていると思うんですが、単なるノスタルジーだけではなく、そこに人間の生活力の中でどういう価値観があったかということを考えていっていただけたらうれしいなと思っています。いつもこういう場で言いますが、博物館が欲しいなと。ぜひ造ってほしいと思います。六郷満山を巡るにしても、どこが出発点で、どこで六郷満山の歴史を学んで出発すればいいのかが見えない。県立平化歴史博物館があるけれど、遠い所です。そういった出発点を豊後高田市で持っていいんじゃないでしょうか。だとすれば、そのお昭和の町にあってもいいんじゃないかと。そこから始まって市の全域へと足を向けてもらうようなことを考えてもらえればと思っています。

赤坂 私自身が豊後高田で一番印象に残っている光景は真玉海岸の夕日です。単純に美しいし、海に沈むというロケーションを大分県ではどこ独占してるんですね。あえて言えば、この財産は努力せずに得ている。勝手に夕日が沈んでいるわけで、だけどそれが美しいと外に発信したからこそ、外に住んでいる私は知ることができました。そういう意味では発信力はすごく大事だと思います。今日は発信する、育てるという言葉が出ました。ここにいる皆さんの豊後高田に対する愛情、自信、誇りがすごく伝わってきました。それを広げていけば素晴らしい市になると思います。発信の前に気付く、発見、発掘するという意味で言えば、もしかしてまだまだ埋もれている人もいるんじゃないかと思うんですね。それを若手リーダーである皆さんが見つけていって、どんどん人の裾野を広げていって欲しい。何といっても古里に誇りを持っていることが何よりだと思います。今後もこの市が発展していくことを願っています。今日がそのきっかけの一部になっていただければうれしいです。どうもありがとうございました。

総括コーディネーター
Ko Akasaka
赤坂耕 1990年入社。社会部、国東支局、竹田支局、地域報道部、報道部長を経て地域報道部長。45歳。豊後高田市の魅力をもっと知りたい、伝えなければ。

これまでのハピカム開催地／平成23年度 宇佐市（10月） 津久見市（3月） 平成24年度 九重町（6月） 日出町（9月） 国東市（12月） 臼杵市（3月） 平成25年度 竹田市（6月） 日田市（9月） 中津市（11月） 東京（1月） 姫島村（3月） 平成26年度 杵築市（6月） 別府市（9月） 佐伯市（12月） 玖珠町（3月） 平成27年度 豊後大野市（5月） 由布市（9月） 豊後高田市（12月）

医療・福祉・心理の融合で福祉社会のリーダーになる

福祉健康科学部

Faculty of Welfare and Health Science

理学療法コース　社会福祉実践コース　心理学コース

社会 × カラダ × ココロ。3つの学びをひとつのチカラに。

人を結び未来へつなぐ
国立大学法人 大分大学
OITA UNIVERSITY

平成28年度一般入試

前期日程
出願期間／1月25日(月)～2月3日(水)
試験日程／2月25日(木) 教育学部・経済学部・医学部看護学科・工学部・福祉健康科学部
2月25日(木)・26日(金) 医学部医学科
合格発表／3月6日(日)

後期日程
出願期間／1月25日(月)～2月3日(水)
試験日程／3月12日(土) 教育学部・経済学部・医学部看護学科・工学部・福祉健康科学部
合格発表／3月20日(日)

BUNDAI □旦野原キャンパス／教育福祉科学部・経済学部・工学部 〒870-1192 大分市大字旦野原700番地 □挾間キャンパス／医学部 〒879-5593 由布市挾間町医大ヶ丘1丁目1番地 □王子キャンパス／附属幼稚園・附属小学校・附属中学校・附属特別支援学校 〒870-0819 大分市王子新町1番1号

★県内TOPクラスの安い保育料
保育園は待機児童ゼロ。保育料の無料化（第2子3歳未満児、第3子以降）を実施中。幼稚園は18時まで月額300円の一時預かりをしています。

★花っこルーム・おひさまひろば
子ども連れで気軽に足を運べる室内公園のような「花っこルーム」や中央公園そばの「おひさまひろば」で情報交換。子育て用品のレンタルも実施中。

★子育てmama相談窓口
先輩ママのコンシェルジュが、子育てに関することから、就労に関することまで、ワンストップの窓口にてご案内いたします。

★学びの21世紀塾
保・幼・小・中学生を対象とした、無料の市営塾です。さまざまな講座を開設し、学習をサポートし、県内でもTOPクラスの学力水準です。

★夢まち分譲地・子育て支援住宅
人気の格安分譲地（坪単価3万円から）や子育て世帯に優しい「エミール域台」入居者募集中！転入する際にも、引越し費用や家賃への一部助成があります。

全力子育て支援中 豊後高田市 市制10周年

豊後高田市役所　子育て・健康推進課　TEL0978-22-3100